

# 近現代における超自然信仰と不安のマーケット

## 書評

オーウエン・デイヴィス（江口之隆訳）『スーパーナチュラル・ウォー

―第一次世界大戦と驚異のオカルト・魔術・民間信仰』

（ヒカルランド、二〇二〇年）

栗田英彦・塚田穂高・吉永進一編

『近現代日本の民間精神療法―不可視なエネルギーの諸相』

（国書刊行会、二〇一九年）

高林陽展

一八五二年、イングランド北部の港湾都市ハルで、誰もいないのに壁を叩く音が聞こえる屋敷があるという噂が町中に広まった。この年の一〇月の寒い夜空の中、その屋敷には二〇〇〇〜三〇〇〇人の群衆が押し寄せ、屋敷の外

でひっそりと聞き耳を立てたという。<sup>①</sup>工業国イギリスの国際的な名声が頂点に達したかに見えた一九世紀半ば、啓蒙主義や科学技術への信頼はもはやゆるぎないものになりつつあった近代のさなかにおいても、「超自然」をめぐる人々

近現代における超自然信仰と不安のマーケット（高林）

の想像力は虚構と片付けるにはたくましく、むしろ現実を構成していたとも言えるだろう。

ハルの例にみられるように、近代をむかえても、西洋世界において超自然をめぐる言説や実践は決して衰えはしなかった。本稿では、このような言説と実践を便宜的に「超自然信仰」と呼ぶことにしたい。超自然信仰は、啓蒙主義の伸長の影で、ときにはそれと結びつきながら、近代を生き延びてきた。近代の条件のひとつとして啓蒙主義が挙げられることからすると、非常に奇異に見えるかもしれない。

通説的な理解では、一七〜一八世紀以降の西洋世界において、人間の理性やその合理的な思考への信頼を思考の軸とする啓蒙主義が次第に影響力を増し、真実を説明する原理としての宗教と魔術の力は次第に削がれていったとされる。その結果、科学の言葉で表現された自然の法則にそぐわない事象は、「超自然(的)」(supernatural)という言葉で表現され、それを信じることは概して非理性のカテゴリーに押し込められることとなった。

しかし、ハルの事例からもわかるように、合理的な思考の枠の外にある事象が「超自然」という言葉で括られ、神や霊、魔術といった諸概念と結びつくとき、それは人間の想像力を介して現実を構成する力を持っている。フィクションが単なる虚構の物語ではなく、歴史的な想像力に基づ

き、かつそれを構成する力を持つことと同様に、である。

このレビュー・エッセイでは、オーウェン・デイヴィス、江口之隆訳『スーパードナチュラル・ウォー―第一次世界大戦と驚異のオカルト・魔術・民間信仰』（ヒカルランド、二〇二〇年）と栗田英彦・塚田徳高・吉永進一編『近現代日本の民間精神療法―不可視なエネルギーの諸相』（国書刊行会、二〇一九年）の二冊を取りあげ、近現代の西洋世界と日本における超自然信仰に関する歴史学的研究について、その成果と課題を論じてゆく。

それぞれの著作を検討する前に、両書がある既存の歴史観を再検討の俎上にあげていることに触れておきたい。それは、近現代における超自然信仰が、合理主義的思考に彩られた時代がゆえに噴出したものとみる歴史観、結局は失敗に終わる近代への反動とする見立てである。例えば、栗田たちは、超自然信仰が近代化による疲弊感を神秘的経験によって埋め合わせようとする「非合理の復権」と理解する宗教社会学的な歴史観に対して、近代に合理、神秘経験②。

他方でデイヴィスは、第一次世界大戦期のヨーロッパにおける心靈主義や占い、民俗的信仰の流行を、その時期に限られた非近代的迷信の噴出、つまり断絶としてとらえるのではなく、二〇世紀初頭においても魔術と信仰は人々の想

像力の中に顕在であり、その点で連続性が認められるのだと主張する。<sup>③</sup>このような批判は、実証的な研究の精度が増すとともに、正当な歴史観だとみなされるようになっていく。本稿の以下でみてゆくのは、超自然信仰が合理的思考へのアンチテーゼとしてではなく、反動的な徒花としてではなく、近現代においても顕在的な思考と実践だったことの具体的な諸相である。

\*

まずは、デイヴィスの著作から見てゆこう。オーウェン・デイヴィスは、社会史を専門とするハートフォードシャー大学教授である。これまでに、魔術や民間療法などに関する研究が多くあり、*The Oxford Illustrated History of Witchcraft and Magic*, Oxford University Press, 2017の編者も務めた一線級の歴史家である。

この著作の目的は、上述したように、第一次世界大戦期のヨーロッパにおける超自然信仰を歴史的連続性の中からとらえなおすことにある。デイヴィスは序文で、マックス・ウェーバーが一九一七年に『職業としての学問』のなかで脱魔術化されようとしている二〇世紀初頭のヨーロッパ世界を論じたことに触れ、実際にはウェーバーが言うような

世俗性、官僚体制、技術と計算への信仰を軸とするような合理的な世界は存在しなかったと主張する。<sup>④</sup>近代戦の様相を深めた第一次世界大戦のさなかにおいても、魔術や宗教は近代の「同伴者」だったというのである。<sup>⑤</sup>

こうした見通しのもと、デイヴィスは、戦時期の超自然信仰にかかわる民俗学的エピソードを収集する。これらのエピソード群は「戦争フォークロア」と呼ばれる。<sup>⑥</sup>彼によれば、「戦争フォークロア」の試みは決して新しいものではない。古くは、第一次世界大戦に参戦したフランスの歴史家マルク・ブロックが戦争を通じた伝説やゴシップの誕生へ関心を示したことに遡ることができる。<sup>⑦</sup>以後、二〇世紀を通じて一定の研究蓄積が生み出されてきた。これに対してデイヴィスは、当時の新聞、前線からの手紙、戦場回想録、帰還兵への口頭取材など圧倒的なまでの量の史料を駆使して、戦時期に突出した民俗学的逸話の収集を試みた。<sup>⑧</sup>そこには「思考、体験、報告、回想、想像、そして物品といった無数の断片」があり、それをつなぎあわせることで「超自然的連想をまとう戦争」を描き出そうというのである。<sup>⑨</sup>

本書は、本論となる第二章から第七章それぞれの章で、予言、霊言、占い、戦場での守護祈願と信仰、戦後への影響を扱っており、いずれの章も戦争フォークロアの再構成

近現代における超自然信仰と不安のマーケット（高林）

と抽出という目的に沿って、多様な「断片」が記述されている。そのなかからいくつかの事例を紹介しておきたい。

まず、一九一四年末に注目を集めたアルスの司祭の予言である。このアルスの司祭とは、フランス革命後に人民の道徳心矯正活動で名を知られ、晩年の一九世紀中ごろには多くの巡礼者を受け入れられるようになったジャン＝バティスト・ヴィアンネのことである。没後、ヴィアンネの言葉を切り取った「予言」が出回り、印刷物として刊行されたが、すぐに忘却された。それが再度注目されるようになったのが第一次世界大戦期であった。他国の侵略とその撃退を予言したヴィアンネの言葉は、フランス軍の士気高揚に貢献すると期待する当局の思惑もあって、世に広く浸透した<sup>10</sup>。戦争がもたらした先行きの不透明さに一筋の光を投げかけるものだったからこそ、アルスの司祭の予言は、その根拠の如何を問われることなく広く信じられたのである。

戦争による不安、あるいは見通しの悪さよって影響力をもつことができた超自然信仰の例として、カイザー数式がある。カイザー数式とは、ドイツ皇帝ヴィルヘルム二世の君主号カイザー（Kaiser）を数値に置き換え、その六文字にそれぞれ六を加え合計すると獣の数字「六六六」になることから、ドイツ皇帝を黙示録の獣だとする言説を指す。大戦半ばの一九一五～一九一六年にかけて、この言説は、

イギリスやフランスの宗教関係者の間で真剣に議論され、広く流行した。それは、見通しの見えない戦争に対する責を「受肉したアンチキリスト」の存在に求めようとする心理がゆえのことであり、またヴァチカンが連合国と同盟国のいずれにつくのかという国際関係上の問題もにらんだことであった<sup>11</sup>。

ちなみに、超自然信仰の流通は、戦争への不安だけではなく、戦後への期待とも結びつくものだった。例えば、戦時期のアメリカから千年王国待望論がアフリカへと伝播したことは、植民地支配を打破し新たな栄光の時代を迎え入れようという宗教指導者の期待がゆえのことだった<sup>12</sup>。

他方で、第一次大戦期のヨーロッパ各地の戦場では守護天使が出現したという言説が流行した。これは、上記のような社会に潜在する不安や期待とは少々異なる動機をもつものだった。この種の言説でよく知られているのは「モンスの天使」にかなする言説である。この言説のあらすじは、中世の弓兵の幽霊が戦場に出現し、矢の雲がドイツ軍へ向かって飛んでいくというものである。この言説はもともと、イギリスの新聞に載った短編小説、すなわちフィクションの筋書きだった。しかし、いつの間にか事実として伝承されるようになり、そこで誇張され、エピソードは足され、最後は天使まで登場し、教会の牧師が小冊子を出して信者

に配布するという事態へとつながった。<sup>17)</sup>

一見すると、このエピソードは、戦場という不安のあふれる場所での護身の願いがゆえに起こったかのように見える。しかし、「モンスの天使」が広く信じられるには、死後の霊に対する当時の人々の想像力の介在が必要だった。守護天使をめぐる語りをよそにして、第一次大戦の戦場では、数多くの幽霊目撃談が語られた。そして、生きている者がこの世をさまよう死者と邂逅することがあるのだという信念はヨーロッパ各国で広く流布された。<sup>18)</sup>

幽霊への信仰の根強さは、心靈主義のさらなる発展とも結びついた。心靈主義は、死後の霊と交信が可能だとする思想であり、一九世紀中葉から英米で流行していた。この思想が大戦期にその存在感を増すのである。<sup>19)</sup> 大戦によって多数の死者が発生した結果、残された遺族たちは彼らの霊と交信する機会を交霊会に求めた。例えば、アーサー・コナン・ドイルの心靈主義への傾倒は大戦で息子を亡くしたことになるものだった。そうした状況から、戦時期から戦間期にかけての交霊会は、死後の霊への信仰表明、交霊という劇的な体験、そして死後の霊との交信による癒しという三つの機能を備えた場となった。<sup>20)</sup> 死別による心理的な傷を癒したいと願う遺族は非常に多く、これを無視できないと考えたイギリス国教会の聖職者たちは、教義に反してま

で心靈主義を支持した。<sup>17)</sup>

その一方で、イギリスでは占いや魔術を公衆の面前で実践することには法的な規制が存在しており、大戦を契機として超自然信仰の規制に関する政治的な議論が広がりを見せたことも興味深い。第一次大戦の時点で超自然信仰に関する規制の根柢となる法は二つあった。一つは、一八二四年浮浪者取締法 (Vagrancy Act) である。同法の第四項は、術や装置、手相などを用いて詐欺や詐欺を目的として運命を告げることを禁じていたが、この「詐欺を目的として」という摘発の条件をめぐって、当時のイギリスでは占い師と当局の間でいちごっこが繰り返られていた。<sup>18)</sup> 当局が摘発しようとする際は騙そうとする意図の有無を立証する必要性がある一方、占い師たちは金銭の移動が個人的利益ではなく慈善のためだとして、告発を逃れようとしたのである。<sup>19)</sup> もう一つの規制法として、一七三六年魔女取締法 (Witchcraft Act) がある。この法律は、浮浪者取締法よりも刑罰が重いものの、魔女術という言葉への当局側のためらいもあって、実際の摘発に至ることはほとんどなかった。しかし、占い師や心靈主義者には摘発への不安があり、大戦期には同法の撤廃を求める運動を起こすなど、規制をめぐる議論が盛り上がりを見せたのである。<sup>20)</sup>

こうした諸々の「戦争フオークロア」を提示することで、

近現代における超自然信仰と不安のマーケット（高林）

デイヴィスは、第一次世界大戦は「再魔術化」の舞台ではなかったと主張した。戦争前から存在していた「超自然」への想像力が戦時期に膨張したことは間違いない。しかし、それは「社会的あるいは文化的あるいは経済的・生活の幅広いトレンドに対応して、常に満ちたり引いたり、消えたり現れたりするもの」だとデイヴィスは言う<sup>②</sup>。超自然信仰は常にあり、それは自然のバイオリズムに従うかのように盛衰をするものだというのである。

デイヴィスが描き出す「戦争フオークロア」は、その多様性と豊かさが圧倒的である。しかし、この「戦争フオークロア」が果たして、近現代ヨーロッパ世界における超自然信仰の連続性を示すのかという疑問は残る。多くの歴史家たちはこれまで、戦争、自然災害、あるいは疫病による非日常性が、社会秩序を混乱させ、新たな言説や実践を生み出したことを論じてきた。果たして、戦争は超自然信仰にとって大きな出来事ではなかったのか。そもそも、戦争が断絶をもたらすのでなければ、なぜこれほどまでに多くの「戦争フオークロア」が存在していたのか。超自然をめぐる想像力が大戦中に喚起され、「戦争フオークロア」として噴出したことにもかわらず、「戦争フオークロア」を断絶的なものとはみなさず、近代を通じた連続性の中におくことは果たして妥当なのだろうか。そもそも本書のタ

イトルは、『スーパーナチュラル・ウォー―第一次世界大戦と驚異のオカルト・魔術・民間信仰』（*A Supernatural War: Magic, Divination, and Faith During the First World War*）であるが、この二度も言及される「戦争」の役割が想定よりも小さいのであれば、別のタイトルにすべきではなかったのか。こうした点にアンバランスとしか言いようのない感を覚える。

このアンバランスさは、「戦争フオークロア」を十分に分析しきれていないことから生じたものかもしれない。多様に、かつ詳細に描き出された事例の背後にある史料の幅は広く、警察や司法史料までも網羅的に収集されている。彼が序文で言うように、断片という断片が集められ提示されている。しかし、その一つ一つの断片に登場する人物、団体、地域に向けられるまなざしは非常に弱い。フオークロアたることを目的としているためなのか、一つ一つの断片の背後にある情報への分析的な記述が極端に弱いのである。

分析的記述の不在は、挙げられた事例の重要な背景を捨象することにつながる。例えば、上述した心靈主義とイングラント国教会との関係の意味を、デイヴィスは十分に析出できていない。以下で詳しく見てゆこう。

当時の国教会は、一九世紀初頭以降、教会礼拝への参加

率が著しく低下する「信仰の危機」の時代であった。<sup>22</sup>この時代、信者の心を引き留める最前線にあったのは下級聖職者たちである。彼らは、教区の信者たちの信頼を維持し、教会の勢威を保つことに腐心していたのだが、そのことは上述した大戦期の兵士の遺族たちとの関係だけに認められるものではなかった。地域住民たちが教会を訪れるとき、その動機は、信仰心だけではなく、稼得、貧困、家族、教育、健康など人生にまつわる様々な不安を治め、安定した秩序のなかに自らを位置づけることでもあった。しかし近代にあつては、こうした様々な不安に対する処方箋はもはや、教会だけが提供するものではない。科学を基盤とした様々な近代的サービスが、少なくともその一部を代替するようになった。そのような状況にあつて、一九世紀末から二〇世紀前半にかけての国教会下級聖職者たちは、信徒の心をつなぎとめるために、魔術的ないし超自然信仰に手を染めてゆく。

その一例が心霊治療 (spiritual healing) である。<sup>23</sup>心霊治療とは、信仰を通じて魂の癒しによって病にある人間を回復させるという超自然信仰、すなわち聖書に記されたキリストや聖人たちの「御業」を再現しようとする信仰の一表現形態である。一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて、国教会下級聖職者たちは心霊治療を積極的に支持した。た

だし、彼ら自身が最初に心霊治療を実践しようと試みたわけではなかった。一九世紀後半において、心霊治療は新興の宗教家たちの専売特許だった。新興の宗教家たちは、手かざしや聖油の塗布を用いたり、あるいは一切の物質的苦痛の否定などを謳うなどして、健康に不安を抱えた人たちの心をつかんでいった。例えば、一九二四年にブラッドフォードの教区教会で行われたジェイムズ・ムーア・ヒクソン (James Moore Hickson, 1868-1933) のヒーリング・ミッションには、ブラッドフォード大主教の参加の下、約一二〇〇人から一三〇〇人の市民が参加したと言われている。<sup>24</sup>国教会の下級聖職者たちは、新興の宗教家たちによる心霊治療を自らの教区政策の一部として取り入れようと試みていたのである。

ただし、病の超自然的治療は当然のことながら、科学的治療の担い手たる医師たちの目にはよく映らなかった。医師にとつて、それは、単に非正規医療ないし代替医療の実践にすぎなかった。国教会上層部もその危惧は十分に認識していた。それゆえ国教会は、一九二〇年のランベス会議第六三号決議によってカンタベリ大主教のもとに心霊治療検討委員会を設置することを決定し、その委員に著名な医師や心理学者を招聘した。<sup>25</sup>目的は、国教会による心霊治療に医師や科学者のお墨付きを得ることだった。しかし、手

近現代における超自然信仰と不安のマーケット（高林）

かざしや聖油の塗布といった方法を医者たちがすんなりと容認することはなく、国教会の目論見は頓挫してしまふ。

ここで重要なのは、国教会は超自然信仰をめぐる多様な競争相手と向き合い、時に敵対し交渉することで、その主たる担い手という地位を手中に収めようと奮闘していた点である。それは、教区民の慰安という近視眼的な目的から生じたものではない。心靈治療にかんして国教会が参与としていたのは不安のマーケットである。健康にかんする不安を抱える人たちが存在し、そこには不安解消のためのサービスの需要が生じる。その需要は少なくとも一九世紀においては、資格をもった医師たちだけが独占できるものではなく、これを獲得しようと、教会、新興宗教家、医師、心理士らは競争状態にあった。この競争状態こそが、二〇世紀初頭のイギリスにおける超自然信仰を理解するのに重要な焦点となる。

もう一つ具体例を交えて見てゆこう。デイヴィスの著作で触れられたモンスの天使に関係することである。デイヴィスによると、宗教系ジャーナリズムがモンスの天使言説を広めようとしていたとき、国教会ダラム主教のハーバート・ヘンズリー・ヘンソン<sup>(26)</sup> (Herbert Henry Henson, 1863-1947) がこれを酷評したという。一見すると、国教会の中堅聖職者が、カルト的な言説に対して警鐘を鳴らし、

超自然的言説を戒めたと判断できるだろう。

しかし、ヘンソンは心靈治療に関しては賛意を表明した聖職者でもある。彼は一九二五年に『心靈治療覚書』(Notes on spiritual healing) なる著作を刊行し、聖職者が病気を患う信者を励ますことは教会で言えば告解と指導に相当するが、心理学でいえば暗示や説得といった治療法に相当するものであり、手かざしや聖油の塗布といった心靈治療も心理学による裏づけを得た科学的かつ宗教的な癒しの技術ではないかと主張している。ここでヘンソンは、心靈治療を新興の宗教家たちではなく、教会の告解と指導といった枠組みのもとで語り、それが科学的にもお墨付きをえられるものだとする。すなわち、国教会のもとで心靈治療という超自然信仰にもとづく医療実践を行うことに道を拓こうとしているのである。上記の二つの事例では、ヘンソンの超自然信仰に対する態度は全く異なっているように見える。

このヘンソンの態度の違いは、超自然信仰の管轄権をめぐる競争、不安のマーケットへの管轄権をめぐる競争という観点からであれば、より整合的に理解ができるだろう。二〇世紀前半において、医学の治癒能力は決して高くはなく、多くの病は依然として不治のものであった。そのようななか、病をめぐる人々の不安は、聖職者の言葉、代替医療

の治療、行商人が売る怪しげな治療薬など、医学以外の手段に容易に導かれた。科学と宗教、合理と非合理の境界線は実にあいまいであり、それらをつなぐのは唯一、不安のマーケットだった。この不安のマーケットで、不安の解消を売りにするサービス提供者たちはそれぞれ自らの正当性を語り、しのぎを削った。医師たちは科学や合理的知見を根拠とした治療法を提供する一方、新興の宗教家たちは聖書を盾に手かざしや聖油の塗布を病者に施した。国教会はこの間に入って、新興の宗教家たちのワザを盗み、それに科学者たちのお墨付きを得て、自らのものとしようとした。こう考えてゆくと、モンスの天使報道に対するヘンソンの態度は、守護聖人による兵士の保護にかなする超自然的信仰が教会の手のなかになかったことから生じたものと解釈ができるだろう。

上述したように、デイヴィスは、超自然信仰は社会・経済に合わせて「満ち引き」するものと表現した<sup>(28)</sup>。しかし、評者が提示した事例を踏まえると、この表現には修正が必要となるだろう。この満ち引きを引き起こすのは不安のマーケットの管轄権をめぐる織りなされる競争関係だったのだと。この点を十分に検討せずに「満ち引き」などと言ってしまうは、まるで現実を超自然化しているかのようになさえ見えてしまう。

\*

次に、栗田らによる『近現代日本の民間精神療法―不可視なエネルギーの諸相』（国書刊行会、二〇一九年）に話を転じたい。本書は、宗教学・思想史研究者栗田英彦、宗教学者塚田穂高、近代仏教史・民間精神療法史研究者吉永進一によって編まれた論文集である。この論文集にはそのほかに、文化史、比較文学、医療人類学、宗教学、宗教史、医学史、生命論、翻訳学、科学史、中国哲学など多様な専門性を有する研究者が寄稿している。

本書では、戦前日本における様々な民間療法、特に霊術や精神療法と呼ばれる治療法の流行や暗示、気合、お手当、霊動などによる奇跡的治癒が検討される。多岐にわたる民間療法家を中心として、彼らが組織した団体とその機関誌、会員の募集と術の宣伝、他者治療・自己修養の技法に余すことなく光を当てている<sup>(29)</sup>。

ちなみに、ここで言う「精神療法」とは、今日の精神医学で用いられる精神療法 (psychotherapy) とは異なり、他人の観念や精神なりの影響で病を治す療術とされる<sup>(30)</sup>。また、民間療法の「民間」とは、医学的な治療法と区別する意図がある<sup>(31)</sup>。

本書の狙いは、とかく現代との対比で語られることの多

近現代における超自然信仰と不安のマーケット（高林）

い民間精神療法を歴史の文脈におき実証的に検討することである。いかなる民間精神療法が、具体的にどのようなようにして生まれ、また消失していったのか。その思想と技法の系譜を歴史の個性のなから浮かび上がらせることが目指される。それは、合理的な近代の反動として超自然思想を見るのではなく、あるいは前近代への回帰をロマンティックに描きだすことでもなく、合理性と非合理性、科学と宗教、伝統と革新のそれぞれが複雑に絡まりあつて形成される歴史の実相を提示することである。

こうした目的のもとで本書は、科学的エネルギーを理論の軸とした民間精神療法の諸相を描き出す第一部、気にかんする理論を軸とした民間精神療法を検討する第二部、そして臼井靈気療法を中心として、スピリチュアル・セラピのグローバルな展開を論じた第三部によつて議論を展開する。それぞれ、第一部には三つの章、第二部には四つの章、第三部には三つの章が配されている。さらに、第四部として、九〇頁にも及ぶ、非常に充実した人物及び著作ガイドが付されている。

ここからは各部ごとに、その議論の要点を見てゆきたい。第一部の第一章・第二章はともに、重さや体積などを計量できず、目にも見えず、知覚できない不可秤量流体の治療効果を謳った民間療法の思想的系譜を検討している。第一

章（中尾麻伊香）は、電気、磁気、放射線などの不可視のエネルギーを名に關した療法のなから、特に物理療法を検討対象とする。中尾は、こうした療法を近代合理主義へのアンチテーゼとしてとらえる先行研究に対して、靈療術と最先端科学の親和性を指摘し、アカデミズム医学においても靈療術と同様の不可視エネルギーを使った療法の使用がなされていたことを論じた。続く第二章（奥村大介）は、不可秤量流体である放射能をめぐつて、欧米には存在しない關係や意味が戦前日本で創出されたことを、松本道別を事例として論じる。西洋でも前近代的な思想と科学の混交はみられるが、日本の場合は一層複雑で奇妙な概念結合がみられるとし、種々の心霊説を放射能概念で読み替えた松本の思想を西欧科学思想受容期に固有の「綺想的な思想文化」として提示する。これに対して第三章は、やや毛色は異なるが、近代ヨーガの世界的普及のチャンネルとして影響力をふるったヨギ・ラマチャラカ（ウイリアム・ウォーカー・アトキンソン）と彼の理論がトランスナショナルなネットワークを通じて拡散していく様相を提示している。

第二部では、気概念を中心とした思想と技法の系譜が検討される。第一章（栗田英彦）では、川合清丸の氣の思想を西洋科学、国体思想、神道・仏教・キリスト教などが混交する歴史的文脈に位置づけ、丹田の一気を重視する仙術

思想が統治思想へと援用される歴史的位相を提示する。第二章（野村秀登）は、中国古代の道家思想、神道理論、朱子学や陽明学、さらに西洋天文学の知識が絡まりあう玉利喜造の靈氣説が、戦前日本の社会政策や社会倫理の土台となったことを論じる。第三章（塚田穂高）は、国家主義的和歌論を論じる歌人・思想家の三井甲之が、手のひら療治という靈術に出会い、明治天皇御集を經典とし、その拝誦を儀礼とする国民宗教を創始する歴史的過程を描きだす。第四章（田野尻哲郎）は、野口整体という民間療法、特にその活元運動という体操の技法を検討する。活元体操は、氣を調整し自然な状態に戻すことを目的としたものだが、その際、体操を構成する一二種類の氣を測定し、それを自然な状態に戻すための測定器である体量配分計が導入されるなど、戦前日本の科学的測定の文化と民間療法には一定の親和性が見られると論じている。第二部の第一章と第三章はいずれも、民間療法の思想が国家観や社会政策、統治術などへ援用されていく様相を論じている点特徴的である。

ヤスティン・スタイン）は、白井の靈氣療法をめぐる、日米の様々な主体が様々な歴史的局面で理論を繰り返し創造してきたことを強調し、トランснаショナルな歴史を探求している。最後に第三章（ヤニス・ガイタニデイス）は、白井の靈氣療法が「レイキ」として世界的に発展したことをコミュニケーション学の理論からの解釈を試みている。本書は、民間療法の思想と技法が、戦前日本というローカルな磁場において、西洋科学と日本に伝統的な文化的リソースが結びつけられた結果として、独特の様相を帯びて登場したことを微細に描き出すものであり、いずれの章も非常に説得的である。特に、民間療法を形成する様々な文化的リソースが丁寧に腑分けされ描き出される、その思想史研究の手法は、まるでカルロ・ギンズブルグの『チーズと蛆虫』を読んでいるかのような興奮を覚えさせるほどである。また、民間療法の思想がサブカルチャーの領域にとどまることなく、ときに国家観と結びついていたことを示した点も、研究成果として十分に評価されるべきだろう。

しかし、思想史のプロジェクトとしてまとめられたものを他の視角から論じようとするのはお門違いなのかもしれないが、デイヴィスと同様に、不安のマーケット、競合するサービス提供者という視点を導入すると、また異なったビジョンが見えてくるだろう。近代日本の民間精神療法に

近現代における超自然信仰と不安のマーケット（高林）

かんしても、その利用者は身体や精神の不調、そこから生じる不安の解消を目的とする点で一つの集団を成しており、そこには不調ないし不安のマーケットが存在する。このマーケットにおいては、医者も療法家も、あるいは宗教家も同列にサービス提供者として需要の獲得を競っていた。こう考える余地が本書には認められる。本書の編者は、民間精神療法の民間は医学的な治療法と分けるための便宜的な言葉だとしたが、実際に論じられているのは医科学の領域と容易にオーバラップする重層的な歴史の様相である。そこからは、ある一つの領域、マーケットの存在が予想されていたのではないだろうか。

実際、本書には、マーケットにおけるサービス提供者の競争・競合が認められる記述が複数確認できる。もつとも明確に示しているのは第一章である。この章は、一九三〇年代の日本で、不可視のエネルギによる病の治癒を謳う物理療法に対して医師たちが警鐘を鳴らし、その後京都府県当局が規制を強めていったことを描き出している。その際の具体的な規制の方法は、医師資格のない者による療術行為を登録制にするというものであった。これは、民間療法家たちが医師たちと同じマーケットに参加しており、競合する医師たちの運動によってマーケットから排除されようとしていたことを示している<sup>②</sup>。しかも、著者の中尾も

述べているように、物理療法で用いられた電気治療器は、民間療法家だけが用いるものではなく、医師たちも使っていたにもかかわらずである。すなわち、共通の顧客、共通の治療器具を持つていながらも民間療法家たちだけが規制の対象となったことになる<sup>③</sup>。このような商業的性格を持つ縄張り競争は、臼井靈気療法や三井甲之の手のひら療治の例でも認められる。

仮に民間療法家を専門家の一種に含めるならば、複数の専門職が一定の問題領域に対して影響力を争っている状況を論じた専門職社会学の成果は参照するに値するかもしれない。アメリカの社会学者アンドリュー・アボットは、近代西洋世界における医療専門職の発展において重要となるのは、専門職集団の組織化でもなければ、提供するサービスの基となる知識や技術でもなく、「知識の抽象化」(abstraction)だと主張する<sup>④</sup>。知識の抽象化とは、哲学でいう還元主義的な指示対象の絞り込みのことであるが、より簡便に言えば、専門知識をより一般的かつ抽象的な表現に置き換えて表現することである。アボットによれば、一般に訴求力のある表現を勝ち得た専門職のみが、ターゲットとする需要をマーケットで獲得し、より成功すれば資格制度や登録制度など法的な制度によって自集団の正当性を確かなものとすることができる。逆に、組織化に成功し、

専門的な知識や技術が確立された場合であっても、知識の抽象化に失敗すれば、専門職としての発展は見込めない。

アボットはその具体例として、一九世紀アメリカの非正規医療の実践家たちに言及する。特にホメオパシーであるが、その実践家たちは一九世紀末までのアメリカ社会に確固として根づき、一定の顧客を得ていた。しかし、細菌学や外科技術の発展など医科学の成功が広く一般に認められるようになる、ホメオパシーの実践領域は徐々に減じられていった。彼らにも組織や倫理綱領があり、自らの科学性を主張していたにもかかわらず、である。

これに関連して、第二部第四章の末部で触れられているカイロプラクティックの事例は注目に値する。これは、スティーブン・G・マーティンの一九九三年の論文を紹介している箇所である。一九世紀末にアメリカに誕生した、不可視のエネルギーの流れを調整する治療術であるカイロプラクティックは、第一次世界大戦のころに、超自然的な宗教的・物理的なエネルギー概念を語るのをやめ、医者を模した診察スタイル、教育機関の設置、科学計測器具の導入など、科学への接近を図った。その結果、カイロプラクティックは相対的に言えばという程度だが、科学性を標榜することで知識の抽象化に成功し、マーケットで一定の地位を確保した。アボット流にいえば、カイロプラクティック

は「科学」という看板の借用に成功し、自らの理論を一般向けに訴求力のあるものに変化させたのである。

では、現在も一定の影響力を持って活動を続けている霊気療法についても同様の説明ができるだろうか。この点を考えるうえで、本書の第三部第三章が、霊気療法の成功要因をコミュニケーション学概念から分析していることに触れておかねばならない。この章では、臼井霊気療法（レイキ）がセラピー文化のなかで影響力を保持し続けた原因を「背景化」という概念で説明している。背景化とは、ある主題について、対話を通して話し手同士が理解したことを共有し、その理解を更新し続けるプロセスとされる。この理解の更新は次第に、主題を背景化し、共通の知識・基盤を確立する。これが、臼井霊気療法の影響力が持続した力学だと言うのである。この議論を、アボットに近い分析視角だと評価することも可能だろう。しかし、そこには、多様な実業者や療法家によるマーケットでの競合関係は視野に入っていない。思想史であればコミュニケーション理論の援用は馴染みのあるものだろうが、その思想史のなかに社会や経済にかかわる問題が見え隠れするとすれば、そして、より立体的に社会・経済の問題をも包摂する歴史的なパースペクティブを構築しようというのであれば、今後の研究は、思想史という枠を超えて、かつコミュニケーションシ

近現代における超自然信仰と不安のマーケット（高林）

ヨン理論にとどまらない社会学理論の援用が期待されることだろう。

\*

啓蒙主義以後の世界においては、人間の理性に基づく合理的な思考に価値が置かれ、超自然信仰に対しては、非合理、非正規、代替といった言葉が冠せられ、サブカルチャーの領域に追いやられた。大筋としては、この理解に誤りはない。しかし、それは超自然信仰がマイナーであり、取るに足らない事象だということの意味するものではない。様々な歴史の局面において、神や霊、魔術は近代においてもなお、人間の想像力を介して現実を構成してきた。それは、本稿で取り上げた二つの著作がいずれも、超自然をめぐる思想と実践の歴史的重要性を示し、合理と非合理、連続と断絶といった二元論的な枠組みには収まらないことを実証的に明らかにしたことからも明らかである。

科学、宗教、そして超自然は明確に分割されず、互いに混淆しあっている。その混淆は、自己、他者、あるいは世界に坎する不安を治めたいという需要によって生じるものであり、その需要が不安の解消手段を提供する主体と交わる場のことを本稿では「不安のマーケット」と名付けた。

超自然信仰はこのマーケットという一つの受け皿なかで、科学や宗教にかかわる多様な思想と混淆し、競合する。まるで、様々な色の溶液が一つの容器に流れ込みまじりあい、もともとの色を変え、マーブル上の曲線を描くかのように、である。

註

- (1) "Spirit rappings at Hull", *The Times*, 21255, 1852, p. 6.
- (2) 栗田英彦・塚田穂高・吉永進一編『近現代日本の民間精神療法―不可視なエネルギーの諸相』（国書刊行会、二〇一九年）、九―一〇頁。
- (3) オーウェン・デイヴィス〔江口之隆訳〕『スーパーナチュラル・ウォー―第一次世界大戦と驚異のオカルト・魔術・民間信仰』（ヒカルランド、二〇二〇年）、三〇五頁。
- (4) 同書、七頁。
- (5) 同書、一〇頁。
- (6) 同書、二六頁。
- (7) 同書、一四頁。
- (8) 同書、二六―二八頁。
- (9) 同書、二八頁。
- (10) 同書、四二頁。
- (11) 同書、七二―七六頁。
- (12) 同書、六四頁。
- (13) 同書、八九―九二頁。
- (14) 同書、一〇三―一〇頁。
- (15) 同書、一一〇―一一九頁。
- (16) 同書、一二三頁。
- (17) 同書、一一四頁。また、こうした霊にかんする思想は、思念で戦争を終わらせることをもくろむ心霊戦の議論へもつながった（同書、一二七―一三〇頁）。
- (18) 同書、一四六頁。
- (19) 同書、一五七頁。
- (20) 同書、一七八頁。法的な規制とは無縁であったのは、戦場での守護祈願と運頼みの類である。幸運の絵葉書やペンダント型お守り（同書、一九三頁）にはじまり、防弾聖書（同書、二五一頁）など、多くのモノが超自然信仰の徴として戦場に出回った。
- (21) 同書、三二四頁。
- (22) 信仰の危機に関して、以下の文献を参照。Callum G. Brown, *Religion and society in twentieth-century Britain*, Harlow: Pearson Longman, 2006; Callum G. Brown, *The death of Christian Britain: understanding secularisation, 1800-2000*, London: New York: Routledge, 2001.
- (23) 心霊治療をめぐるのは、高林陽展「二〇世紀前半イギリスにおける教会・心理学者・精神科医の相克」スピリチュアル・ヒーリング問題をめぐって』『清泉女子大学キリスト教文化研究所年報』（二二号、二〇一四年）、六〇―八五頁を参照。
- (24) "Spiritual healing missions", *British Medical Journal*, 2(3330), 1924, p. 775. 高林「前掲論文」六四頁。
- (25) The Lambeth Conference, resolution archive from 1920, Anglican Communion Office, 2005. 高林「前掲論文」六八頁。
- (26) デイヴィス、前掲書、九一頁。
- (27) Herbert Hensley Henson, *Notes on spiritual healing*, London: Williams & Norgate, 1925. 高林「前掲論文」七四―七五頁も参照。
- (28) デイヴィス、前掲書、三三四頁。
- (29) 栗田・塚田・吉永「三頁」。

近現代における超自然信仰と不安のマーケット（高林）

- (30) 同書、五―六頁。
- (31) 同書、一二頁。
- (32) 同書、三七―三九頁。
- (33) 同書、四一頁。
- (34) Andrew Abbott, *The system of professions: an essay on the division of expert labour*, Chicago: University of Chicago Press, 1988, pp. 98-111.
- (35) *Ibid.*, pp. 28-30.
- (36) 栗田・塚田・吉永、前掲書、二〇六頁。
- (37) 同書、二七九頁。

（本学文学部准教授）